希望を求めて

AMDA30年 ⑤

地域の支え

本部に集うボランティア

善意で広がる人道支援

「AMDAって岡山に本部があるんだ」。意外そうに言う人がいる。医療NGO「AMDA」（北区伊福町3）は、世界を舞台に災害や紛争に遭った人たちを支援する。国際的に活躍するNGOが東京や大阪ではなく岡山に拠点を置くことに驚きを感じる人は多いかもしれない。成沢貴子理事長(56)は「地元に根付いているから、それが自然なんです」。岡山にルーツがあるAMDAは、今も昔も地元の人たちに支えられている。

「『菅波先生が頑張ってる』って、応援する人は多かったですよ」。ボランティアとして機関紙の発行などを手伝う村野陽洽さん(73)は振り返る。AMDA創立者の菅波茂さん(67)＝マレーシア・クアラルンプール事務所勤務＝は内科医。2010年まで北区楢津で「アスカ国際クリニック」（開業当時は菅波内科医院）を経営し、AMDAの本部も院内にあった。病院に通う人にもAMDAは身近な存在。1995年の阪神大震災では敷地内にテントを張り、被災地へ運ぶ荷物や寄付された支援物資を整理した。村野さんは「病院で世話になった人も手伝っていた。一体感があったな」と語る。

村野さん自身も、AMDAに設立当初から関わってきた。村野さんは、クリニックに近い備前一宮郵便局の元局長。貯金の利子をNGOなどに寄付する「ボランティア貯金」の申請や受け渡しに携わり、初期のAMDAはこの寄付金で海外での活動を実現できた。村野さんは「30年続いたのはすごい」と感慨深げだ。

定期的に寄付を寄せる信販会社や、チャリティー公演の収益金を寄付し続ける音楽家の夫婦。AMDAの活動に共感し、支援を続ける人は多い。AMDAは国からの補助を受けず、活動資金のほとんどを寄付でまかなっている。自由で多彩な活動を支えるのは、こうした人たちの善意だ。

菅波さんは「30年間支えてくれた人、一緒にやってきてくれた人に感謝している。それが一番」と話す。クアラルンプール事務所に移り、活動の舞台は変わったが、岡山での医師時代の経験は今につながっている。

「緊急救援でも内科でも、『見放されたくない』というメッセージを受け取るのは同じ」。そして、活動の信念をこう語る。

「人は、相手が決して逃げないと分かると信頼する。緊急救援では、いち早く駆けつけること。患者さんには、いつでも対応すること」

岡山で開業していた時には、ユーモラスで前向きな言葉で患者を励ました。今も同じ笑顔で各国の人たちと接し、人道支援の輪を広げていく。

世界の人たちが、明日への希望を求めている。それを実現しようとするAMDAの挑戦も続く。

【五十嵐朋子】

（おわり）

AMDAを支えるボランティアスタッフたち。機関紙の発送などを手伝っている＝北区伊福町3のAMDA本部で今年7月2日

AMDAとボランティア

「NGOの活動に市民参加を」との理念のもと、一般の人がボランティアに参加する機会を多く設けている。本部内にある「ボランティアセンター」（小池彰和センター長）や、高校生主体のボランティア組織「AMDA高校生会」などがある。緊急救援のための街頭募金も行う。参加や寄付の問い合わせはAMDA（086・252・7700）。